標点

教室から机と椅子がなくなったら

県総合教育センター所長
起塚　郁夫

現在、次期学習指導要領に向けた中央教育審議会での議論が大詰めを迎えています。何を学ぶかに加えて、どのように学ぶかについても言及されることになります。主体的・対話的で、深い学びを実現するためです。

「コンピュータを使って情報を得ることができる時代に、知識を教えることにどれだけの意味があるのですか」これは、先日、オーストラリアにおけるアクティブ・ラーニングの実情を視察した際の、校長の言葉です。

オーストラリアでも近年、子供を主体にした教育改革が進められています。小学校では、三、四人のグループに分かれて床に座り、教室の壁を黒板代わりにしたりＩＣＴを活用したりして、課題を追究し表現していました。どのような問いを子供に提示するかが鍵となります。

次に、印象に残っている発言を紹介します。

○子供一人一人の状況をよく知る。

○教師にとっては恐ろしいことだが、子供に責任を持たせ、主体的に学ばせる。

○よい生徒は、興味を持って自分で調べ、よく質問し、自分の目標達成状況を認識している。

○教師は、よき学習者であり、よき学習支援者でなければならない。

○子供同士の対話、子供と教師との対話は、新たな考えを生み出す。

○子供たちが新たなことにチャレンジする精神を大事にして、どれだけのことを子供が知りたいのかを評価する。

座学形式の授業も見学しましたが、教科内容を教えるのではなく、資料の読み取りやまとめを通した批判的思考力の育成が重視されていました。オーストラリアの教師も、講義中心の指導観を改めることには不安があるが、やり遂げなければならないことだと言っています。今回の視察で最も共感した場面でした。

さらに、博物館や教職経験者が職員として勤務する公立図書館が、積極的に教育プログラムを提供していることも特筆されます。

「子供ってすごいな。あの小さな体で、一生懸命考え、感じ、思い、願っているんだな。」

ある研修講座での講師の発言です。

これまで我が国の教師たちが培ってきた「授業研究」を一層深め、次代を担う子供たちに必要とされる力を育む努力を重ねていきます。